

郷土文化財紹介

寺院遺跡シリーズ

＜樵楽山西方寺遺跡＞

「西方寺」という字名は、「樵楽山西方寺(しょうらくさんさいほうじ)」という寺院が消滅後、その繁栄と威徳を偲び、後の人々により呼ばれるようになったのではないのでしょうか。それでは、西方寺という字名の前は、どんな字名であったのでしょうか。

「高辺(高部)」に対して「低辺(ひくべ)」ではないかと考えられなくもないのですが、まったく分かっていません。

木曾川がつくった河岸段丘は、古い順に松源地面、高部面、坂下面、西方寺面です。字「西方寺」は最も新しい段丘面です。昭和58年からの農地構造改善事業の折に黒土を取り除いたところ川上川に由来する砂礫も確認され、この砂礫は天正何年かの洪水の跡と言われています。洪水の被害が常にあったであろう古代中頃までは、河原の状態ではないかと推測されます。高辺に住する人達により開墾が進められ、河原が耕地へと移る頃には、段丘崖の下部にも集落が発生してきたのではないのでしょうか。木曾川縁では漁労も盛んになり、また対岸へ渡る渡し場も造られてきたと考えられます。推測ですが、このようにして樵楽山西方寺という寺院の展開される地域が開けてきたのではないのでしょうか。



↑上より原の台地、高部面、段丘崖、西方寺面

樵楽山西方寺は、いつ頃存在した寺院でしょうか。その一番古い記録は、天文12年(1533年)京都醍醐寺の巖助(げんじょ)

和尚が伊那の文永寺へ結縁灌頂(けちえんかんじょう)のため下向(げこう)した際に書き残した「巖助信州下向日記」のなかに見られます。雨のため西方寺に4泊し酒宴や連歌で遊んだ記録です。

五月十五日 雨 立向田瀬道二里、西方寺ノ泉藏坊ニ至ル、自(ヨリ)二郎左衛門方相副人申付也、此所迄ハ自京六十四里計踏歩歟(か)云々、於在所相尋之處、京迄之道四十八里六日路也云々、本街道ノ時 此分歟(か) 如何(いかん)。

十六日 雨 西方寺滞留

終日連哥沙汰之 坊主懇切之義其也。

十七日 雨 今日猶滞留渡筏不出之故也 終日連哥 非時(ひいじき) 坊主振舞也。

十八日 雨夕方晴 今日猶滞留也

自大坊樽持参 連歌問也

盃酌催興了入夜、 坊主振舞也

所望之間 數多書□□了。

十九日 晴夕雨 西方寺ヲ立 大仏ノ渡無相違舟賃之事泉藏坊申付云々

自西方寺道重行テツマゴニ一宿也、

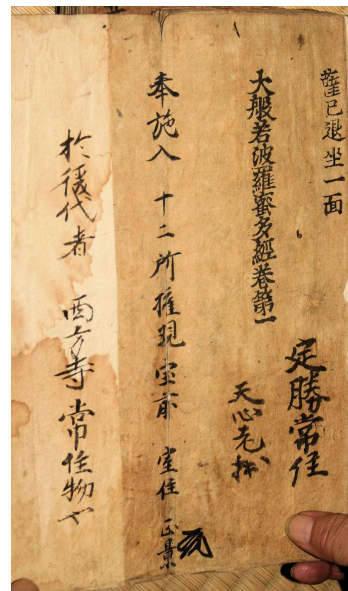
舊田小太郎方ヨリ舉状有之

妻子ハ木曾一家也云々、則木曾路之内也 封守之事申間遣之畢 扇牛玉圓等遣之了。

(恵那市史資料編より引用)

次に大桑村定勝寺に保存される「大般若波羅密多經」の奥書にある天文12年(1543年)と天正10年(1582年)の記録です。

- ① 奉施入十二所権現宝前室住正景
 - ② 於後代者 西方寺常住物也
 - ③ 定勝常住 天心老拙
- 大般若波羅密多經卷一の奥書き
三人の名が墨書され、次の順に移動したようです。



→ 般若波羅密多經を入れる箱の内書き
 樵楽山西方寺 天文十二癸卯年三月日



「大般若波羅密多經」六百卷は、苗木遠山氏中興の祖とされる室住正景が、応永24年(1417年)、遠山氏の繁栄を願ひ十二所権現に奉納したものです。126年後の天文12年(1543年)、何らかの理由により西方寺へ移されました。西方寺住職は「大般若波羅密多經」を手にし「於後代者西方寺常住物也」と、また箱の内書きに「樵楽山西方寺天文十二癸卯季3月日」と記しました。両方の「西方寺」の文字は同じ住職の手による文字に見えますし、たいへんありがたいものを手にできたと喜んだのではないのでしょうか。

39年後の天正10年(1582年)は、樵楽山西方寺が焼き討ちされ宝物が奪われたと伝承され、西方寺の最後の年です。川上村史には「大般若波羅密多經卷二九九」の奥書き「右彼尊經 隣国苗木一乱砌 天心卷物年来望願處 索之新添六百軸也 伍百之内一箱不足 為末代且天長地久處 天正十壬午年八月吉日 定勝常住」がとりあげられて、「苗木一乱砌」とあります。この争いの中で西方寺は木曾義昌の息子愛宕により焼き討ちされ、天心和尚が年来願望していたものを略奪したのでしょうか。やはり、定勝寺住職天心宗球も、「大般若波羅密多經」五百卷(百卷紛失)を手にして喜んでいるようです。

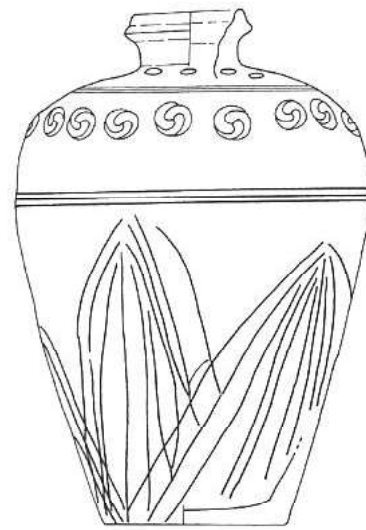
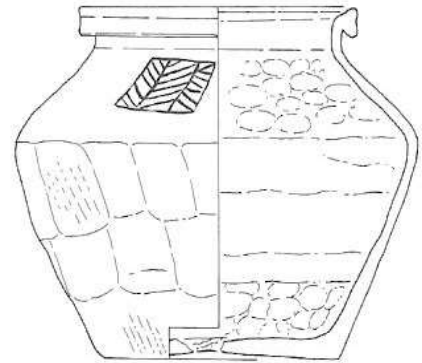
今も坂下で目に触れることのできる遺物に五輪塔や宝篋印塔があります。武士、僧侶、役人らの墓や供養塔で、鎌倉から室町時代に盛んに建立されたものです。西方寺の段丘崖の部分には「五輪」という字名が残り、沢山の五輪塔が立っていたようです。五輪塔の下から、葬儀に使われた骨壺などが沢山出土しました。これは陶器ですので年代鑑定がなされ、13世紀頃からの品物

で瀬戸古窯などで焼かれたことが分かりました。



↑ 旧西方寺公会堂裏に整備された五輪塔群

→ 西方寺遺跡出土の小形壺
 常滑焼 十三世紀後半
 (坂下町史より)



← 西方寺遺跡出土の瓶子(いじ)
 古瀬戸灰釉(こせとはいゆう)
 十四世紀 (坂下町史より)

他に、遺物としては唐渡銭が多数出土し、今の西方寺公会堂の辺りには、字名として「大門跡」「堂庭」「塔のうしろ」などがあり、「池」、「納戸」、「泉蔵坊」、「弁天堂」などの跡も確認されています。

これらのことから樵楽山西方寺は、1200年代から300年余、坂下の西方寺集落で栄えた由緒ある大きな寺院であったと考えられます。

西方寺跡推定図

(原寛氏作図)

